

短歌

短歌について

2

主な歌人と代表歌

10

万葉集

96

古今和歌集

104

新古今和歌集

110

百人一首

116

石川啄木

一八八六—一九二二

岩手県生まれの歌人。若いころに「明星」に短歌がのせられて、注目をあびました。その後、出身地の岩手県盛岡市、北海道、東京とわたり歩きますが、生活はくるしく、まわりの人から借金をして生活するありさまでした。くるしい生活を背景にした歌が多く、三行に分けてかかっているのが大きな特徴です。(ここでは、行をかえる部分を／でしめしました)

東海の小島の磯の白砂に

われ泣きぬれて／蟹とたはむる

浜辺の白砂の上でぼんやりとかにとあそんでいると、知らず知らずのうちに涙がながれてきた。

「東海の小島」とは、日本のことです。くるしいことが多く、人生がうまくいかずになやんでいた啄木が、泣きながらかにとたわむれる啄木自身の小ささをあわれんでいるようです。

たはむれに母を背負ひて／そのあまり
軽きに泣きて／三步あゆまず

あそびで母を背負ったところ、あまりに軽かったので悲しくなって、三步と歩くことができなかった。



このとき啄木は東京で一人て生活し、母親や奥さん、子どもを北海道の友人にあずけたままでした。母親を深くしたいながらも、親孝行をしたくてもできない啄木の気持ちだが、母親の軽さと自分の心の重さとなってあらわれています。「母を背負ひて」とありますが、実際に背負いはしなかったようです。

はたらけど／はたらけど猶わが生活
楽にならざり／ぢつと手を見る

はたらいてもはたらいても、生活は楽にならない。じつと自分の手を見つめる。

この歌を作ったときは、新聞社につとめていましたが、給

料は安いものでした。家族が病気がちで借金もあつたので、生きていくのがやつとだったにちがいありません。それを自分のせいだと考え、じつと自分の手を見つめたのです。そんな、啄木のなげきがつたわってきます。

不來方のお城の草に寝ころびて／
空に吸はれし／十五の心

不來方のお城があつたあとの草にねころんでいると、夢をもつていた十五歳のころの自分がなつかしく思われる。

「不來方のお城」は、啄木の故郷にある盛岡城の城あとのこと。生活がくるしく、思うとおりにならない生き方をしている自分も、十五歳のころには将来に大きな夢をいだいていのだとなつかしく思い出しています。「空に吸はれし／十五の心」という言い方に、夢がきえてしまった、せつない気持ちがあらわれています。

ふるさとの訛なつかし／停車場の
人ごみの中に／それを聴きにゆく

故郷のなまりがなつかしく思えて、停車場に故郷のなまりを聞きに行く。

啄木は、「石をもつて追はるることく（石をもつて追いかけられるように）」故郷を出ていきました。それでも故郷への愛情はなくなかなかつたのでしよう。「停車場」は、ここては上野駅のことです。上野駅では、東北地方からの列車が着くたびに、なつかしいふるさとの方言を話す乗客がおりてきます。なつかしい思いにかられて、ふるさとの岩手の方言にふれてみたくなつたのです。

やはらかに柳あをめる／北上の
岸辺目に見ゆ／泣けとごとくに

柳がやわらかな緑にそまつている北上川の景色が目前に見えるようだ、まるで泣けといわんばかりに。

北上川は、故郷の岩手県を流れている川です。子どものころにすぎした北上川の景色を「泣けとごとくに」思い出すことで、くるしい生活をおくっている自分の心がゆさぶられるのでしよう。「やはらかに」「やなぎあをめる」と、やさしい感じをあたえる「や」の音が続いたあと、「きたかみの」「きしべめにみゆ」とかたい感じの「き」の音が対比して使われています。この歌からは、ふるさとをなつかしむ気持ちが強くつたわってきます。

俳句

俳句について

.....
132

主な俳人と代表句

.....
140

季語例と句例

.....
203

河東碧梧桐

一八七三—一九三七

主に明治時代に活躍した俳人です。愛媛県松山市に生まれ、中学校で**高浜虚子**（↓168ページ）と出会いました。二人は親友となり、ふるさとの先輩である**正岡子規**（↓186ページ）の指導を受けながら俳句を学びました。

師匠であった子規がなくなったあと、碧梧桐は、自分の感情を句によむ「新傾向俳句」の道へ進みます。五・七・五の定型や季語にとられない碧梧桐の新しい俳句はたくさんの人に広まりました。碧梧桐のもとでは、のちに自由律俳句で有名になる、**荻原井泉水**（↓149ページ）などが育ちました。

秋の夜や学業語る親の前

（秋・秋）

秋の夜は長い。そんな夜に親の前で学業について語りかけているよ。

秋の夜長に、学校であったできごとや、勉強したことを家族に語りかけているようすが目にうかびます。

松山の中学を出た碧梧桐と虚子は、京都の高校に進みます。そのあと、仙台の高校に転校しましたが、十月に退学しました。二人で東京へ行き、子規の家に転がりこみます。上京後は新聞社で記者として働きしました。

赤い椿白い椿と落ちにけり

（椿・春）

赤い椿、白い椿と、順番に花が落ちた。

椿の花は丸くて大きく、ちるときには花全体がぼとりと落ちます。花びらではなく、花が丸ごと落ちるようすは、生命の終わりをあらわしているようです。赤い椿の花が落ちた次の瞬間、別の木から白い椿の花が落ちました。それぞれの木の下に落ちた花がたまっていきます。

この句は、虚子とともに子規の弟子として勉強していたときのものです。子規は、「写生」の精神があらわれたものとして、この句をとて高く評価していました。

この道の富士になり行く芒かな

（芒・秋）

すすきにかこまれたこの道を歩いていると、いつのまにか富士山に入りこんでいっているようだ。



なりゆくとは、なつていく、うつりかわつていくという意味です。富士山へ続く道を歩いているときによんだ句です。あたりにはすすきが一面に生えて、秋風にゆれています。富士山へ続く、どこまでも広いゆるやかな道の中にいるという感動をよんでいます。

愕然として昼寝覚めたる一人かな (昼寝・夏)

……おどろいて昼寝から目を覚ますと、一人になつていた。

愕然とするとは、とてもおどろくということです。はつと何かに驚いて、昼寝から目を覚ましました。家の中を見まわすと、家族が全員出かけてしまつていても静かだつたという句です。

上の句が七文字ある、ふしぎなリズムの句です。このころから、五・七・五の十七音にとらわれない句を作ることを考えていたのでしょう。

思はずもヒヨコ生れぬ冬薔薇 (冬薔薇・冬)

……思いがけずヒヨコが生まれて、冬の薔薇もさいたよ。

薔薇は、バラとも読みます。冬のバラがきれいにさくことと、ヒヨコが生まれることの間には、何の関係もないように

思えます。碧梧桐はこの二つを並べることで、いい天氣が続く、冬の陽気をあらわしました。この句は、のちに碧梧桐が進む「新傾向俳句」のさががけとなりました。

見たものをそのままえて季語を大切にするやり方に疑問を抱きはじめて、自分の考えや実感を大切に作る句をよむようになった碧梧桐は、この俳句を広める活動をはじめました。俳句の伝統を守る虚子と、道が分かれはじめますが、二人の友情は、最後までとぎれることはありませんでした。

曳かれる牛が辻でずつと見廻した秋空だ

……ひかれてどこかへ行く牛が、分かれ道でずつと秋空を見回している。

辻というのは、道が何本かに分かれているところです。牛はどこかに連れていかれる最中、その辻でずつと秋空を見回しています。そのすみきつた秋空に、自分の今までの人生を重ねてよんでいるといわれています。

この句は十七音の定型を完全にこわし、長い文字数でよまれています。このように長い句をつくつたり、逆にもっと短い句をつくつたり、さまざまな表現を試していました。最後には、ルビ俳句という、漢字に本来の読み方ではないルビを振つてよむ俳句をつくることに挑戦していました。しかし、還暦をむかえた六十歳で俳句の世界から引退しました。

ペンネーム

西東三鬼さいとうさんきという名前の俳人がいます。少しかわった名前ですね。

この「西東三鬼さいとうさんき」は、本名ではありません。本名は齋藤敬直さいとうけいちです。どうして「西東三鬼さいとうさんき」という名前になったのでしょうか。

同人誌どうじんし（おなじ考えをもつ人があつまって出す雑誌）に作品がのることになったときに、世話人せわにんから電話がかかってきて「すぐに名前を考えなさい」といわれて、とっさに思いついたのが「三鬼さんき」だったというのです。「西東さいとう」は「齋藤さいとう」からの当て字です。

ほかに、多くの歌人・俳人がペンネームを使っています。

伊藤左千夫いとうささちお 本名は幸次郎こうじろう。小さいころから「さち」とよばれていたのので、その音に「左千夫」という字をあてました。
河東碧梧桐かわがひてへきごとう 本名は兼五郎へきごろう。「碧梧桐へきごとう」は「兼五郎へきごろう」の音をもじったものなのです。

北原白秋きたはらびやく 本名は隆吉りゅうきち。中学生のときに、友達と文学雑誌をつくって、みんなでペンネームを考えました。それぞれ「白」の下に続ける一字をくじ引きしたところ、「白秋はくしゅう」があたったことからペンネームとしました。

高浜虚子たかはまきよこ 本名は清きよ。「虚子きよこ」は、本名の「清きよ」をもじった

ものなのです。正岡子規まさおかしきがつけました。

内藤鳴雪ないとうめいせつ 本名は素行もとゆき。人の身の上は、自分の力ではどうしようもなく、ただなりゆきにまかせるという考えから、「な

りゆき」に「鳴雪」という字を当てました。

中村草田男なかつくさくたお 本名は清一郎せいいちろう。父親がなくなつて、跡をつがなければならぬのにぐずぐずしていたときに、親せきの一人

から「くさつた男だ」とののしられました。それに対して、「くさつた男かもしれないが、そうそう出ない男だ」という

気もちで「草田男くさたお」とつけました。

夏目漱石なつめそうせき 本名は金之助きんのすけ。昔の中国の人が、「石に枕し流れ

に漱ぐ（俗世ぞくせをはなれて自由にくらす意味）」というところを、まちがって「石に漱ぎ流れに枕す」と言ってしまった。

「石に漱ぐのは、歯をみがくため、流れに枕するのは耳を洗うためだ」と言いのがれたという故事から「漱石そうせき」とつけました。

正岡子規まさおかしき 本名は常規つねのり。「子規しき」はホトトギスのことで、鳴

きながら血を吐くといわれています。結核けっかくにかかってしまい、はじめて血を吐いたあとから「子規しき」と名のるようになりま

した。

若山牧水わかやまぼくすい 本名は繁しげる。「牧まき」は母親の名前マキから、「水みづ」は、

生まれた家のまわりには川が流れ、滝がかかっている、水を見るのが大好きだったことから、好きなものを二つあわせて「牧水ぼくすい」としました。

さくいん

◆コラム一覧いちらん

病びよう気きと短歌

..... 61

昔むかしの恋こいと結けっ婚こん

..... 65

歌うたによまれた花

..... 79

三さん大だい歌か集しゅうはどどううちちががううの

..... 103

俳はい句くが自じ由ゆうによよめめななかかつつたた時じ代だい

..... 151

ペペンネネーム

..... 167

俳はい句くと暦こしよみ

..... 181

短歌さくいん

あ

あひにあひて物思ふころのわが袖に やどる月さへ濡るる顔なる	伊勢	19
逢ひ見ての後の心にくらぶれば		
昔はものを思はざりけり	藤原敦忠	122
逢ふことの絶えてしなはなかなかに		
人をも身をも恨みざらまし	藤原朝忠	122
あをによし奈良の都は咲く花の		
薫ふがごとく今盛りなり	小野老	100・103
あかあかと一本の道とほりたり		
たまきはる我が命なりけり	斎藤茂吉	45
あかねさす紫野行き標野行き		
野守は見ずや君が袖振る	額田王	69・99
秋風にたなびく雲の絶え間より		
もれ出づる月の影のさやけさ	藤原顕輔	114・127
秋風にはつかりがねぞ聞こゆるなる		
たがたまづさをかけて来つらむ	紀友則	35
秋風のふきあげに立てるしらぎくは		
花かあらぬか浪のよするか	菅原道真	52
秋来ぬと目にはさやかに見えねども		
風の音にぞおどろかれぬる	藤原敏行	78・108

秋さらば見つつのへと妹が植ゑし		
やどのなでしこ咲きにけるかも	大伴家持	24
秋近う野はなりにけりしらつゆの		
をける草葉も色かはり行	紀友則	35
秋の田のかりほの庵の苦をあらみ		
わが衣手は露に濡れつつ	天智天皇	64
秋の野のみ草刈り葺き宿れりし		
宇治のみやこの仮廬し思ほゆ	額田王	68
秋はぎの散りのまがひに呼びたてて		
鳴くなる鹿の声の遙けさ	湯原王	79
明けぬれば暮るるものとは知りながら		
なほ恨めしき朝ぼらけかな	藤原道信	65
明けばまた越ゆべき山の峰なれや		
空ゆく月の末の白雲	藤原家隆	70
浅茅生の小野の篠原忍ぶれど		
あまりてなどか人の恋しき	源等	121
葦引の山鳥の尾のしだり尾の		
ながながし夜をひとりかも寝む	柿本人麻呂	7・29
あしひきの山のしづくに妹待つと		
我立ち濡れぬ山のしづくに	大津皇子	22
朝戸あけて見るぞさびしき片岡の		
檜のひろ葉にふれるしらゆき	源経信	83
朝ぼらけ有明の月と見るまでに		
吉野の里に降れる白雪	坂上是則	120

朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに	藤原定頼	125
あらはれわたる瀬々の網代木	藤原公任	73
朝まだき嵐の山の寒ければ	宮柵二	86
散るもみぢ葉を着ぬ人ぞなき	会津八一	11
あたらしく冬きたりけり鞭のごと	土岐善麿	66
幹ひびき合ひ竹群はあり	大伴旅人	23
あなごもるけもののごとくながきよを	僧正遍昭	6・54・109・118
ほたのほかげにせぐくまりをり	山上憶良	89
あなたは勝つものと思つてゐましたかと	藤原定家	75
老いたる妻のさびしげにいふ	阿倍仲麻呂	12・108・117
あな醜賢しらをすと酒飲まぬ	和泉式部	124
人をよく見ば猿にかも似る	能因法師	126
天つかぜ雲の通ひ路ふきとちよ		
をとめの姿しばしとどめむ		
天飛ぶや鳥にもがもや都まで		
送り申して飛び帰るもの		
天の原思へばかはる色もなし		
秋こそ月のひかりなりけれ		
あまの原ふりさけ見れば春日なる		
三笠の山にいでし月かも		
あらざらむこの世のほかの思ひ出に		
いまひとたびの逢ふこともがな		
あらし吹く三室の山のもみぢ葉は		
竜田の川の錦なりけり		

新しき年の初めの初春の	大伴家持	25
今日降る雪のいやしけ吉事	壬生忠岑	120
有明のつれなく見えし別れより	大式三位	124
暁ばかり憂きものはなし	源兼昌	127
有馬山猪名の笹原風吹けば	藤原伊尹	122
いでそよ人を忘れやはする	有間皇子	13
淡路島通ふ千鳥の鳴く声に	土岐善麿	66
幾夜寢覚めぬ須磨の関守	石川啄木	61
あはれともいふべき人は思ほえて	若山牧水	95
身のいたづらになりぬべきかな	正岡子規	61・81
家があれば筈に盛る飯を草まくら	小野小町	26
旅にしあれば椎の葉に盛る	持統天皇	46
遺棄死体数百といひ数千といふ		
いのちをふたつもちしものなし		
呼吸すれば、胸の中にて鳴る音あり。／＼		
風よりもさびしきその音!		
幾山河越えさり行かば寂しさの		
終てなむ国ぞ今日も旅ゆく		
いちはずの花咲きいでて我目には		
いとせめて恋しき時はむげたまの		
夜の衣を返してぞ着る		
否と言へど強ふる志斐のが強ひ語り		
このころ聞かずて朕恋ひにけり		